

## 美しい日

「私にとっての白いハト」と題してたくさんの方々から文章を寄せて来ていますが、その中に、バルセロナの稲吉委子さんが、白いハトの訪問を受けた美津子さんの話を聞いて、ピーターが「美しい話を聞くな」とコメントしたことを書いていました。私も久しぶりにそこを読み、あらためて白いハトの到来を感動をもって味わっています。

思えば、20年前の12月3日でした。突如として、宇宙の彼方から、永遠の白いハトが美津子さんに飛んできたのですが、これは神の深いふかい計画であったことは、地上の時間の経過とともにいよいよはっきりしてきました。偶然と思われる事象が、ほんとうにたくさん起きました。どれ一つ欠いても、白いハトはその姿を現すことはなかったでしょう。

そしてあれから20年後の今年、12月3日の日に、わたしたちは風の教会の起工式を迎えることになりました。神の計画に、恐れおののかない者がいるだろうか。風の教会の話が始まり、今に至るまで、ほんとうに奇蹟、奇蹟の物語です。人間の力で造るのではない。風の教会は、白いハトの具現。その土台はキリストであり、わたしたちのさんびと祈りの上に築かれる。

私は再び、「なんとという美しい話か」と感嘆し、そして思うのです。この教会で、わたしたちは主の頭に香油を塗り、その足を洗う者とされるだろう、と。

風の教会は、わたしたちグループのものではなく、最後の時を迎えた地球のためであり、ここに主ご自身をお迎えする教会です。ここに主が、ご自身を顕されるということは、キリストのからだが目に見える形で現れるということなのです。

美津子さんはかつて、イエスさまが芦屋の浜を泥まみれになって歩いておられるビジョンを見ました。主は、地球の罪を背負い、人々の悲しみを担い、もう泥まみれになっておられる。

高価な会堂を建てるほどの金があるなら、もっと他に使い道があるのに……という声もあるでしょう。しかし、風の教会は、贅沢や無駄使いではない。弟子たちでさえ、高価な香油をイエスさまに注ぎ、主の足を洗う女に向かい、「何のためにこんな無駄使いをするのか。それを高く売って、貧しい人たちに施すことができたのに」と憤りました。

いつの世にも「正論」を吐く者はいる。しかし主は、彼らに言われます。

なぜ 女を困らせるのか

わたしによい事をしてくれたのだ

(マタイ 26:10)

「よいこと」というギリシャ語(kalo)は、「美しい」という意味でもあります。女は、イエスさまに「美しいこと」をしたのです。それを主は、なによりもよるこばれた。

わたしたちは、主のよるこびのために呼ばれたことを知るなら、どんなことをしてもイエスさまをよるこばせたい。わたしは、このためだけに生きる。

ならば、主の足を洗え。

わたしたちは、風の教会で、主の足を洗う。主は、追いつめられた今の世の人のため、そして末期的な地球のために、泥まみれになって歩いておられるのです。

主の痛みをいたみ、主の悲しみをかなしめ。そして、主をお慰めするのです。

高価な香油を惜しげもなく注いだあの女のように、わたしのまごころをもって、わたしの涙の祈りをもって、わたしは主に、わたしのハートをそそぐ。そして、主の足を、わたしのさんびと祈りで洗おう。

純白の白いハトの日。わたしの胸は、熱く燃える。

美しい、うつくしい白いハト。ここより全地に飛んで行け。

うつくしい、美しい風の教会の日に。

2007年11月27日

ピーター

## ひとり子を賜ったほどに

「白いハト」から20年の記念日が来ました。この20年のことは勿論ひとことで言い表すことはできるものではありませんが、感動の日々でした。あえて感想をひとことで言うとしたら何と言うかな、と考えると、私の口から「一日も退屈したことがない」という言葉が出てきました。主に出会う前、私は「退屈することのない人生を与えて下さい」と、まだ神の名を知らなかったけれども、神なるものに祈っていました。神はそんなひとりの者の願いを聞いて下さったのですね。

退屈しないというのは、次にあることが予想できないで、いつも新しい、わくわくする期待と感動がいつもあること、増し続けることでしょう。主との出会いは、私に、そんな新しい人生を与えてくれました。

私は今日(白いハト記念日の一週間前です)、主に祈り求めました。この20年を言い表すのに一番びつたりのみことばを下さいと。私が予測したのはガラテヤの言葉でした。

生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

(ガラテヤ 2:20)

これが私にとってはびつたりのみことばです。しかし、今日祈って与えられたのはヨハネに書かれているみことばでした。群れに与えられたものだと思います。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

(ヨハネ 3:16)

これは「白いハト」のすぐあと、ある朝「聖書を読みなさい」と語られ、与えられたみことばです。私はびつくりして「聖書のどこですか」と聞き返しました。すると「ヨハネ」という声があり、「ヨハネのどこですか」と聞くと、目の中に「3・1・6」という数字が現れました。そしてヨハネ3・1・6が、3章16節であると分かるまで半年もかかりました。神はいろんな方法で語って下さるのですが、みことばを通して御自分の思いを伝えて下さるということを知ることになりました。

神は御子イエスさまを私たちに与えて下さった。この世 私たち を愛する余り、御子の命を下された。御子をよるこばないだけではない、知るうともせず、殺せとまで叫び、そしてほんとうに殺してしまった者のために、御子の命を下されたのです。そこまでして私たちを救おうとして下さった。一人の人も滅びることがなく、永遠の命を得てほしいからです。御子はその神にゆだね、御自分の命を捨てて愛を現して下さいました。父なる神の愛も、御子の愛も、どんなに考えても説明のつかない愛です。絶対の愛と呼ぶのが一番ふさわしい。

絶対の愛がある。すべてはこの愛から始まり、この愛に至る。この愛は神の願いでもあります。白いハトはこの愛を 神の願いを全地に伝えるもの。この20年は、そしてこれからの日々はさらにそのためにあるということでしょう。

一人の人ももれることがなく、この神の愛を知ることが 神の愛に生きることが、神が白いハトを送って下さった願いです。「永遠の命を得よ」とは、神と御子イエス・キリストを知ることです。イエス・キリストを知れ。白いハトは神の願いを翼に乗せて飛び続けます。

永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです。

(ヨハネ 17:3)

2007年11月27日

美津子